

えから来ていますが、西郷さんの「敬天愛人」のことばには、儒教のわくにとどまらないものがあります。

「二十一 道は天地自然の道なる故、講学の道は敬天愛人を目的とし」

「二十四 道は天地自然のものにして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給うゆえ、我を愛する心をもって人を愛する也」

「二十五 人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽くし人をとがめず、我が誠の足らざるをたずぬべし」

これらの西郷のことばの中には、キリスト教的愛のエコー（こだま）があります。また、西郷の生き方、身の処し方の中には、苦しみを共に担うコンパッションの生き方があり、これは、西郷がキリシタンであったことを証示しているように思われるのです。

久米邦武の幸福論

西田 みどり

大正九年（一九二〇）、『歴史地理』（第三五巻）に発表された久米邦武の「西洋物質科学の行詰り」は、科学技術が人々の生活を大きく変えようしている時代にあつて、「西洋物質科学」は行き詰まることを強い筆致で指摘したものである。当時、農業にはトラクターが使われ始め（米）、普及すれば人間の厳しい

農作業が大幅に軽減される可能性が見えていた。日本では豊田織機が紡全工程機械製造に成功した。複写機が発明され（独）、電話が広範囲に普及し、ラジオの実験放送が始まるなど、情報流通の面にも革命的な変化が起き始めていた。電動機推進の航空母艦も建設された（米）。科学技術はさまざまな分野に新しい機材をもたらし、世界を変えようとしていたのである。

そんな中で発表された久米論文は、科学技術がもたらすものを「商売の競争に後る、といふより外には」（同論文）意味はないとし、「静かに思慮をなし、自然を楽しむ余地を喪失しゐるではあるまいか」（同）としている。なぜ、久米は大正九年の時点でこのような見解を持ちえたのだろうか。

岩倉使節団の記録掛りとして明治四年から六年にかけて一年九カ月にわたって米欧を視察し、その詳細な記録を『特命全權大使米欧回覧実記』（全百巻、明治十一年出版）としてまとめた久米は、同書の中で視察した工場など科学技術の粋を集めた設備を克明に描写している。そのときの視点は科学技術の力を肯定したもので、日本の「後れ」を認めている。

しかし、一方でその差はたかだか五十年程度のものに過ぎず、日本は追いつくことができるとも言ふ。その根拠は、科学技術発達の差の原因が才能の優劣にあるのではなく、生きるうえでの思想の違い、価値観の違いにあるからである。人間の力を助力する機械を発明する道を進んだ西洋に比べ、東洋は技術の発達に執着せず哲学的な研究にその知を費やした。それを転換すれば科学技術を発達させるのはたやすいと見ているのだ。

久米が指摘する西洋と東洋の思想、価値観の違いは六点であ

る。①有形と無形、②済生の道と高尚な理論、③理系の学問と文系の学問、④起業と哲学研究、⑤「科学技術で便利な生活を」と「科学技術は贅沢を生む邪なもの」、⑥日常生活に利便性を求める・求めない。

では西洋の科学技術発達の根底にあるものは何なのか。久米は「バイブル」だという。バイブルが「盛大流行」していることで人々に「敬神」の心が強く芽生え、それが西洋を支え、国の富強を生んでいる（第十九巻）。ただ、バイブルの内容については「天ヨリ聲ヲ發シ」とか「死囚復活ク」で「瘋癲の譚語トナスモ可ナリ」であり、教会で執り行われる儀式についても奇妙なものだと感想を述べている。にもかかわらず、久米がバイブルやキリスト教を否定していないのは、宗教の役割とは人によりき行いをさせる機能だと考えているからだ。日本にはバイブルに匹敵するほど敬神の心を人々に呼び起こさせるものがない。それも科学技術が発達しなかった要因であることを示唆している。

岩倉使節団から約五十年後の大正九年、先述したように日本では豊田織機が紡全工程機械製造に成功し、西洋に追いついた。久米が考察したとおり、西洋の科学技術は五十年で追いつけるものだったのだ。しかし追いついた時点で、久米の物質科学に対する考えは変化している。それは「追いつく」ものではなく、むしろ止めなくてはならないものとなっている。論文冒頭で久米は人文系の学問の衰退を嘆き、その衰退が科学の暴走を放置し世界規模の戦争を許したと述べ、求められているのは科学技術を支える思想であるという。人間の幸福とは何なの

か。それは物質の科学技術にはないということである。九十年前に科学技術の限界を看破していた久米の言葉に耳を傾けるべきではないだろうか。

神との出会いと自然をめぐる諸経験

——透谷・独歩・蘆花の場合——

柴田 真希都

本研究は日露戦争前後から読書青年たちの自然体験の案内となつた書物『自然と人生』（一九〇〇）と『武蔵野』（一九〇二）の著者、徳富蘆花（一八六八—一九二七）と国木田独歩（一八六九—一九〇八）を取り上げる。彼らが後に知識人・宗教家となる青年らの、自然を見る眼やそのさいの感情の持ち方を導き、それらの一般への普及という点でも重要な役割を果たしたのであろうことを重くみて、彼らが日本近代に刻んだ「神との出会いにおける自然」の諸相を確かめる必要を認めたからである。この二人に加え、彼らの同時代人であり、いち早く世に出て夭折した北村透谷（一八六八—一九四）を加えることにより、彼ら「弟達の世代」（前田愛）の代表者が、日露戦争以後の青年層に明け渡した神と自然にまつわる思索の傾向、特にキリスト教に関わるそれを四次元的に再構築したいと考える。

本研究は日本の諸思想の連なりを「神との出会いにおける自然」という観点から整理しなおしてみようという試みの一部にあたる。それゆえ、まずは神体験や神探求にふれたテキストを